

刑部恵都子の生きる道

『不死の道』神行顛末記

2009年4月13日

平成20年11月29日「不死の道」神行開始

まずは神行の行程を記します。
車で新幹線富士駅に向かい、駅で岐阜組二人を拾って、富士宮浅間神社に向かう。
神社では結婚式が行われていて、晴天の中を幸せそうなお嫁さんが静々と歩いていた。神行の始めの神社で、こうしたのどかで平和な光景を見ることが出来たことが嬉しかった。

その後、村山浅間神社へ・・・
この神社は十数年前に、初めはこうした神社があることすら知らず、行くつもりもなかった時に、何故か不思議なエネルギーに誘導され車を走らせ、気がつくところの神社の前にいたことがあった。
また、ある時は別な場所に行くつもりが、霧にまかれて気がつくところの神社の前に着いてしまっていたこともあった。この浅間神社は神仏一体の「富士浅間根本宮」と言い、古来より山岳修行も行なわれていたようだ。
境内には大きなご神体の巨木が何本もあり、そのエネルギーの強いこと・素晴らしいこと、いつ行ってもとても嬉しくなってしまう神社だった。またこの神社の拝殿に額づけば、ご祭神の“此花咲くや姫”様からメッセージを頂くともしばしばだった。

今回は初めからこの神社に祈りに来させて頂くつもりでいたので、静かに心から祈ることが出来た。

しかし今回そこでいただいたお言葉が、あまりにも思いがけないお言葉だったので、歓びよりも戸惑いの方が強かったのは否めなかった。そしてそれはその後ずっと続いていった。

その顛末は・・・

拝殿の前に額づき・・・
「日の国・霊の国・火の国。霊を持つ者たちを護り導いてください。……………」
いつもの様に、祈りの言葉が静かに口をついて終わるや否やすぐに、此花咲くや姫様のお言葉が響いてきた。

『産屋^(*)を焼いた・・・と・・・燃やした・・・と。
我は火の神・・・火の大神
我が産屋を焼いたことをとくと解釈せよ。
私の御子(みこ)もまた火の神・・・日の神・・・
「日と火・・・!？」
その通り、我は火の大神。
我が産みし御子なるは、別なる次元から生まれし者たち・・・
我もまたこの次元におるものではない。
宇宙は開いていく・・・
先般そなたに見せたように宇宙の扉(ゲート)は開いていく。
扉が開くことによって、良きもの、悪きもの生じる。
全てのものをその扉(ゲート)から招き入れることは出来ぬ。
人の生死の執着は無用なことで理解しながら、未だ得心できぬそなたの苦しみ・・・
そろそろそこを超えねばならぬ。
扉が開くこと、戸が開くことを真に望むなら、その全てを受け入れねばならぬ。
全てのことになんの執着もいらぬ。

この世界は激しく変動していく。
それを止めることは誰にも出来ぬ。

そしてそれはまた、新しきものを生み出す元となる。
我が産屋を焼いたことをもっと理解せねばならぬ。

我は火の大神なるもの・・・
富士(不死)の山は数度の噴火をして、火を吐いてこの姿となった。

元々こうした姿の山ではない。
火を吐く・・・このこともまたとても必要なこと・・・
世界の山々が火を吐き出している・・・
そろそろ日本の山々も動き出すであろう。
それをまた歓びとせねばならない。
一人一人が火を吐き出さなければならない・・・
自らを燃やして、蘇えらねばならぬ。
それがそなたへの答えである」

お言葉を聞いていてある意味成る程と思いました。
そして此花咲くや姫様が産屋を燃やしたことの真の意味を考え続けてもいました。

神話では「天孫(てんそん)・邇邇祇の尊(ニニギノミコト)に、産まれて来る御子が尊(天津神:アマツカミ)の子かどうかを疑われて、身の潔白を証明するために産屋を焼いた中で御子を産む」ということになっています。

しかし神々の中で不倫でもないでしょうし、ならば何を疑われたのか！？

果たしてそれが問題なのだろうか？

また、イザナギ・イザナミの大神の神話は火の御子(カグツチの神)をお産みになった際に、イザナミの女神がホトを焼かれて黄泉(ヨミ)の国へお行きになられた。イザナミの女神も、此花咲くや姫様も火の御子をお産みになっておられる。

この辺りまで書いて手が止まってしまった。

イマイチ何かがピンと来ない・・・胸(腑)に落ちない・・・
それが続いて数ヶ月が経ってしまいました。

しかし昨夜やっと腑に落ちる思考が響いてきました。
“そうだったのか！・・・ありがたい・・・”
飛び起きてノートに響いてきた事を書き続けていました。

富士山は古来「不死山」と呼ばれていた。此花咲くや姫様にとって「不死山」は産屋だったのですね。
爆発(火を吐き出しながら)を繰り返しながら、今の雄々しい姿を再生してきた。生み出してきた。

そうなのだ！つまり不死とは再生を顕わす(あらわす)・・・
新しい命の再生・・・まるで火の鳥・・・不死鳥の如く・・・

自らを炎で焼き尽くす朱雀の如く・・・新たなる命として蘇える。

「不死の道」とは再生の道・・・蘇えりの道のことなのだ。
太陽もまた古来再生の神と言われてきた。
西に沈む太陽は翌日必ず東から昇ってくる。それ故太陽神は古来再生の神と尊ばれてきた。
ということは「太陽の道」もまた再生・・・の道。であったのだ。

焼いた産屋の中で産み落とした三人の御子は、当然のことながら新しく再生した命を持って宇宙に上っていった神々なのだ。

かくのごとく、此花咲くや姫様は「自らを炎で焼いて蘇えり、再生した新しい命を持った人々を、開いたゲートから宇宙に招きいれる」と仰っていたのだ！

お言葉をいただいたとき何故瞬時にそれを感じ取れなかったのだろう！

こうした神行を重ねた私にとって、ある意味、この問いかけは解りやすい筈なのに、私は数ヶ月にわたって解くことができなかった。体調を崩したことは関係なく、やはり時間調整が必要であったのかも知れない。

とは言えこの夜、あまりにも不甲斐無い自分が申し訳なく、夜が白むまでただひれ伏して祈ることしかできなかった。

先へ進みましょう。

村山浅間を後にして向かったのは富士吉田浅間神社です。

ここは昔から個人的にもとても好きな神社で、ここに来ると常に靈気というか密度の濃い神氣、エネルギーを感じるのです。

ここでは今回太陽の光の洗礼をタップリと受けました。

凄かったですね。この洗礼は・・・

その光の写真を年賀状にしてお届けしたのはその中の一枚でした。

まるで「火の鳥」とも見える光の写真も撮れています。

富士山の鬼門と裏鬼門に位置する浅間神社、それこそが「不死の道」の中心であり、その先に世良田の東照宮・・・日光東照宮と続いています。

富士山は噴火によって姿があれども、いつも雄々しく聳え立っています。

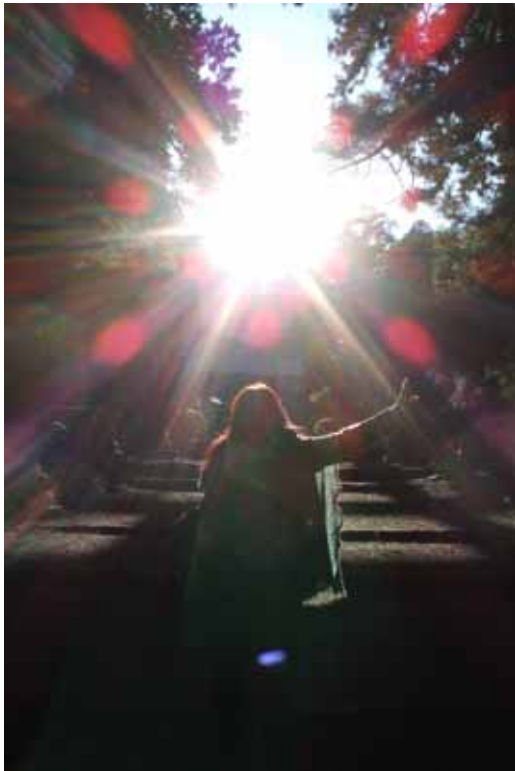
それこそ不死であるのですね。変化をしながら蘇える。

地球もまた未来永劫の時をかけて変化してきている。

それが、地球が生きているということなのでしょう。

富士(不死)山のご祭神・此花咲くや姫様が「我、火の大神」と自ら宣言された後、吉田浅間神社で、太陽(日)の洗礼を受けました。

その時は左程気にならなかったのですが、なかには「火の鳥」とも思える写真も何枚も撮れました。今になってとても腑に落ちることがあります。



お言葉を頂いた時、「日と火ですか？」との私の問いかけに頷かれたことを思い出しました。

太陽神「天照大御神」と「此花咲くや姫様」はご同体なのでしょうか。

前にお聞きしたご連枝ということなのかもしれません！？

その後、富士吉田浅間神社を後にして世良田に向かって車を走らせました。

世良田には東照宮があります。そしてその東照宮はまた不死の道の線上でもあります。

そしてその先には日光東照宮があり、そこまでを「不死の道」と称しているようです。

1996年に出版した「聖書の暗号とホビ予言の超シンクロニシティ(*2)」に書いた神行の話も今回同様「太陽の道」と『不死の道』の神行の話ですが、内容・結果は全く違うものになりました。

日光東照宮の後ろに聳える男体山の話はこれからまた変化をしていくでしょうから、次にまわすとして今回はこの辺で終わりたいと思います。

ただ灼熱の太陽の熱によって、此花咲くや姫様の仰せの通り、世界中で火山の噴火や広大な土地の山火事が起こってきている昨今、人間の知恵がどうこの自然災害に立ち向かえるのか……心して見つめ続けなければならぬでしょう。

そして人間としての再生、蘇えりがどのように行なわれていくのかも見つめ続けなければなりません。

常に心が平安であることを……生きとし生けるものの幸せを祈ります。

合掌 刑部恵都子



【用語解説】

*1 産屋(うぶや):文化用語の基礎知識より

出産のための部屋のこと。出産は不浄なものであるために家屋とは別に小屋を設け、これが終わると燃やす風習が存在した。また産屋に男性が近寄ることも避けられていた。

*2 「聖書の暗号とホビ予言の超シンクロニシティ」

徳間書店 <http://www.tokuma.jp/book/chochi-library/1176094217217>